

はじめに

全国障害者問題研究会の月刊誌『みんなのねがい』に3回目の連載をさせていただいた。1回目は、2001年度。『一人ひとりが人生の主人公』というタイトルで、障害のあるなかまたちの、日々の暮らしや労働の姿を少しでも伝えることができればと思いつながらの連載だった。2回目は、2006年度。障害者自立支援法が施行され、福祉制度が切り崩されていくという危機感がひしひしと押し寄せていた。そんななかでも、障害のあるなかまたちの人権や発達する権利を奪ってはならないと日々奮闘する職員、職員集団を応援しなくて執筆した。タイトルは『しなやかに したたかに 仲間と社会に向き合って』（これらはそれぞれ全障研出版部より単行本として発行されている）。

そして、今回、2017年度。『成人期のなかまたちが教えてくれること』というタイトルで連載を始めた。成人期にかかわる人たちだけでなく、さまざまなライフステージにかかわる人々とともに語りあうことができれば、というねがいからである。これまで、青年・成人期にあるなかまたちの暮らしや労働、そして発達をみるなかで、また、なかまたちとともに過ごす実践者と語りあうなかで、成人期を支えることは、実は、なかまたちの人生

全体を、まさにかけがえのないものとして尊重することなのだ実感してきた。だからこそ、もっともっと他のライフステージにかかわる人といっしょに語り、実践を検証しあっていくことが必要なのだと思うようになった。

前回の連載からの10年ちよつとの間は、本当にめまぐるしく法や制度が変わってきた期間であった。そして、それは今も続いている。障害者自立支援法は、「応益負担」「日払い計算方式」といった形で、福祉は買うもの、受けたサービスへの対価として利用料を支払うという市場原理を障害者福祉に本格的にもちこんだ。「日払い計算方式」によって、職員の安定雇用が難しくなり、非正規雇用が増大した。それらは、なかまのねがいを徹底的に大切にし、職員集団のねがいと撚りあわせながら、新しい価値を創造しようとする「実践」の基盤を大きく揺るがすものであった。実践に、はじめから答えなどはなく、日々試行錯誤をしながら進めていくものである。その地道なプロセスそのものにかけてがえのない価値があるのだが、そうした実践を構築していくことが難しくなったのは事実である。

しかし、今再び、実践の重要性、必要性が語られはじめている。あらためて実践で何を大事にしていくのか、なかまのねがい、集団のもつ意味、職員集団のあり方などに焦点をあてて考えてみたい。

学校教育においても、2007年度に始まった特別支援教育が浸透していく10年であった。その是非については、引きつづき検証が進められなければならないが、通常学級で学ぶ支援の必要な子どもたちに大きな光があたりることになったことは疑いない。しかし、その一方で、重い障害のある子どもたちのこと、その実践が語られにくくなっていないだろうか。私は、わが国の障害児教育の歴史において、「障害の重い子どもたち」、そしてその子どもたちに教育権を保障しようとしてきた関係者たち、その発達をねがって向きあってきた教師たちが残してくれたものは、世界に誇るべき思想であるし、実践であると考えている。その財産を、若い世代にどう引き継いでいくのか、これは、私たちの世代の大きな課題である。この本では、そのことも意識して書いたつもりである。

また、「個別の教育支援計画」作成という幼児期、学齢期、青年期、成人期をつないで支援計画を構築するという考えも浸透しつつある。しかしこれが本当に内実をともなったものになっていくには、ライフステージをこえた連携のあり方が問われなければならないだろう。その人の一生を見通し、「切れ目のない支援」を構築していくにあたって何が肝要か。それは、とりもなおさず「発達」「発達保障」という軸にほかならないと考える。なかま一人ひとりが何に心を動かし、何を喜び、何を悲しみ、何をねがっているのか、徹底的になかま自身の目線に立った見方が必要である。そうでないと、支援者や周囲が一方的に押しつける人生になってしまう。もっと言えば、支援者や周囲にとって都合のいい人生に

なってしまう危険性もある。

この本では、「発達」とは何か、「発達保障」とは何か、そして乳幼児期から成人期、高齢期まで「発達」「発達保障」という軸をもつことの意味について考えることをテーマとした。この本が、乳幼児期、学齢期、成人期それぞれのステージにかかわる支援者たちがいっしょに考えていくための、なんらかのきっかけになれば嬉しい限りである。連載中も、各地のサークル等で、読みあわせ、討論をしているという声をうかがい、大きな励みになった。誰もが人間らしく生きていけるような地域になるためには、それぞれの地域で、いろいろな立場の人がつながりあっていくことが不可欠である。

幼児期と学齢期、学齢期と成人期：それぞれのライフステージ間には、必ず「非連続性」と「連続性」が存在する。連携が大切と言っても、それは、後のライフステージの課題を、前のライフステージにそのままおろしてやることではけつてない。小学校の課題を就学前にそのままおろすだけでは、多くの子どもたちが苦しむことになる。卒業後の課題を学校段階にそのままもち込むことは、本来のキャリア教育ではない。人は誰でも、新しいライフステージで、自分をつくりかえていく。そのプロセスをおおらかに見守り応援するためには、それぞれのライフステージにかかわるものたちが、より深く互いを知り、語りあう必要がある。

この10年をプラス評価だけでは語ることは難しいが、「障害者の権利に関する条約」を手にすることができたことは忘れてはならない。そして、これからの10年が、障害のある人の権利、あたりまえの暮らしの実現がすみずみまでいきわたっていく10年になることを心からねがう。

2018年6月

白石 恵理子